

米国における東亜同文書院大学と 愛知大学の「中日大辞典現象」

愛知大学経済学部助教授

李^り 春^{しゅん} 利^り

一、訪米の経緯

一九〇一年に上海で設立された東亜同文書院大学を源流にもつ愛知大学の中国研究は、「第二の世紀」(The second Century)に入った。「第二の世紀」の幕開けの象徴は二〇〇二年の文部科学省二一世紀COEプログラムの採択による愛知大学国際中国学研究センター(ICCIS)の発足である。二〇〇一年の東亜同文書院百年祭が二〇世紀を締めくくったとするならば、二〇〇二年のICCIS発足は二一世紀への発進にほかならない。

私はたまたまICCIS推進委員会のアメリカ部会に入っているため、米国の中国研究の拠点校と研究交流のネットワークを構築するために、二〇〇三年にICCIS事務局長の山本一巳教授と一緒に二回にわたって、米国の主要大学を訪問した。

一回目は三月一三日から三月二二日までで、アメリカ西海岸のカリフォルニア大学ロサンゼルス校(UCLA)、UC

バークレイ校、スタンフォード大学、ワシントン大学とハワイ大学を訪問した。二回目は九月七日から九月一八日までで、中西部のミシガン大学とシカゴ大学、東海岸のプリンストン大学とハーバード大学を訪問した。

二、ミシガン大学Ⅱ全米初の「東亜同文書院大旅行誌」 収録

今回の訪米で、予期せぬ発見ができた。それは、愛知大学とその前身校である東亜同文書院大学は米国でも広く知られていることである。

例えば、米国アジア研究の重要な拠点校であるミシガン大学のAsia Libraryは、中国書・日本書コレクションは全米最大級の一つである。二〇〇三年、ミシガン大学Asian LibraryはUCバークレイ校と競って日米教育関連の基金会から助成金を勝ち取り、「東亜同文書院大旅行誌」マイクروفイルム版を収録した。同大学日本書コレクション館



写真1 ミシガン大学所蔵の東亜同文書院大旅行誌
マイクロフィルム版

長の Kenji Niki (仁木賢司) 氏によれば、「東亜同文書院大旅行誌」の収蔵は全米初であるといわれている(写真1)。今後はさらに「中国調査旅行報告書」も収蔵する予定である。仁木氏はミシガン大学に来る前、コロンビア大学アジア図書館に長く勤めていた。

彼は有名な日本研究者ドナルド・キーン教授らをサポートして、大学院生のアジア研究の指導にも当たっていた。

東亜同文書院生の大調査旅行は、五期生から始まったといわれている。例えば、一九〇六年の大調査旅行に参加した書院生は、中国切つての日本留学奨励派、洋務運動の推進役である湖広総督・張之洞(『勸学篇』著者)や両江総督・端方を訪問し、歓迎と協力を受けるなど、その出発点の高さが窺える。一コースは三ヶ月間、総計七〇〇コース、約五千人の参加による四〇年間に及んだ大調査旅行(The Great Journey)は、世界中の大学や教育機関を眺めても、これほど徹底した組織的なワールドワークはないと言っても過言ではない。その範囲も中国大陸のみならず、東南

アジアやモンゴル、遙かシベリアにも及んでいた。大旅行誌の目次検索はいま愛知大学図書館のHPで可能になった(<http://regel.aichi-u.ac.jp/tools/foa/index.html>)。これらの調査記録をまとめた「大旅行調査報告書」(The Report of the Great Journey)は、満鉄調査部資料と並んで、二〇世紀前半の中国社会経済に関する貴重な第一次資料であり、双璧を成し得る存在である。調査の目的や背景などは違うものの、徹底した実証主義と実地調査に裏付けられたこれらの調査資料が、アメリカや欧州を含めて世界的に高い評価を得ているのは、その価値からして当然である。満鉄調査部資料は世界的に評価され、一部英訳されて欧米の一流大学の図書館に収蔵されているが、それと並ぶ重要性をもつ世界的な中国研究史料「東亜同文書院・中国調査旅行報告書」の研究・発掘はまだ発展途上にある。

しかし、米国ではいち早くその史料価値に注目し、事業化した。愛知大学図書館の成瀬さよ子さんの調べによれば、大旅行報告書をベースに東亜同文会が一九一七〜二〇年の間に刊行した『支那省別全誌』全一八巻は、なんと三五年以上も前に米国のUMI社によってマイクロフィルム化されていたという。

愛知大学創立五十周年記念出版事業として『中国調査旅行報告書』のマイクロ化を手掛けた雄松堂の会長が、六八年に渡米した際このマイクロフィルムを発見。日本販売代理店交渉をし、七七年に『支那省別全誌』として発売した。北米では『支那省別全誌』は、米国議会図書館、ミシガン大学とカナダのブリティッシュ・コロンビア大学に一部ずつ保存され、マイクロ化した原本はミシガン大学の所蔵で

ある。UMI社は、三八年に学位論文などをマイクロ化して資料を提供する会社としてミシガン大学内に設立された。

この世界的な文化・研究の遺産の発掘・研究・出版を強化し、国際的な視野でそのブランド価値にふさわしい形で世界に還元することは、愛知大学の重要な戦略的課題である。それは同時に愛知大学の国際的知名度を「形」にして、大学のアイデンティティを活かしながら内外におけるブランド力を形成するという意味で、今後大学間の厳しい生存競争に勝ち抜くための戦略的な切り札にもなりうる。

三、研究法としての大調査旅行と「地域研究」

東亜同文書院の独特な研究教育方法と戦後米国発の有名な「地域研究」(area studies)との関係に注目した米国の研究がある。

「東亜同文書院の大旅行を軸とした地域研究・フィールドワーク教育方法は、ジョージア州立大学の Douglas Reynolds 教授(第四回東亜同文書院記念賞受賞)が喝破したように、第二次大戦後発展したアメリカの地域研究よりも遙かに早い時期に(半世紀引用者)、しかも内容においてもアメリカに劣らない優れた教育方法であった。」(滬友会HP = <http://koyukai.hp.infoseek.co.jp/>)

〔氏は〕東亜同文書院の大旅行調査を研究し、それが戦後米国で発展した地域研究よりも古い歴史を持つ優れたものであることを検証し、『地域研究の知られざる起源・日本の東亜同文書院』を刊行して広く世に紹介した。また戦前の日中両国の間に一九世紀末から二〇世紀初めにかけて

の十年間、黄金の十年ともいうべき日中蜜月の一時期があったこと、その形成に東亜同文会及び東亜同文書院があずかって大いに力があつたことを論証し、著書『新政革命』(英語版及び中国語版)により広く世に紹介した。〔東亜同文書院基金会HPより、同上〕

ついで、Douglas Reynolds 教授の著書は“China, 1898-1912: The Xinheng Revolution and Japan”と題して、ハーバード東アジア研究叢書(Harvard East Asian Monographs, ISBN 0-674-11660-7)の一卷として、Harvard University Press より出版されている。

地域研究の源流は、第二次世界大戦後、ハーバード大学の John King Fairbank 教授を中心とする「地域研究」グループによって開発された有名な研究法にさかのぼることができる。複数の研究分野を跨る学際的な(inter-disciplinary)研究が最大の特徴であり、戦後アメリカにおける中国研究と発展途上国研究の水準が飛躍的に引き上げられたといわれている。

愛知大学名誉教授・元学長の牧野由朗先生によれば、一九七〇年代中頃、Fairbank 教授は愛知大学に招かれて講演したという。当時の講演テーマは中国の近代化(modernization)についてであり、自分も質問したと記憶されている。²⁹⁾

二〇〇二年、COE・ICCSの申請・発足にあたり、研究拠点リーダーの加々美光行教授の問題意識の根幹をなしているのは、まさにこの地域研究の限界を克服し、新しい中国研究の方法を模索・確立することであった。

四、「中日大辞典現象」

約二五〇年の歴史をもつプリンストン大学の美しいキャンパス・セクターヒルの三階に、かつてアルベルト・アインシュタイン博士が教えていた教室（三〇二号）がある。この「アインシュタイン教室」と同じ階の反対側に、プリンストン大学東アジア図書館がある。その中の一角で、私は愛知大学・中日大辞典を発見した。収蔵されているのは一九六八年に出版された中日大辞典の初版である。辞書は相当使いこなされており、本体はかなり傷んでいる（写真2）。「苦労さま」と言っただけであらうだった。その近くに中国「五四運動」の旗手、日中戦争・太平洋戦争時の駐米大使も務めた胡適（HU SHIH）・元北京大学学長の「開卷有益」という肉筆の字が掛かっている。

東アジア図書館副館長の Martin Heidra 博士によれば、愛知大学といえば、すぐ『中日大辞典』が思い浮かぶという（この評価は中国でもまったく同じである）。彼はオランダ人で、同国の中国研究の名門校・ライデン大学（Leiden University）の出身で、プリンストン大学で博士号を取得した。彼の専門は中国研究であるが、中日大辞典を使って日本語を覚えた。その後、東京大学に二年間留学した後、この図書館に勤めるようになった。ライデン大学では、東アジア研究の専門であれば、中国研究の専攻でも日本語が必修であるという。

また、館長の Tai-loi Ma 博士はもともとシカゴ大学で長く勉強し、仕事をしてきた。彼が学生の頃、米国での東アジア研究は中国語と日本語両方の習得が要求されていた。



写真2 プリンストン大学東アジア図書館所蔵のぼろぼろの中日大辞典（初版）

日本ベースの中国研究の成果を読むために、日本語が必修である。そのため、中日大辞典は広く使われていた。中日大辞典自体大変素晴らしい辞書であるが、当時はそれしかなかったという。

プリンストン大学のほかに、今回訪問したミシガン大学、ハーバード大学燕京図書館（Harvard-Yenching Library）でも、中日大辞典が発見された。ハーバード燕京図書館では中日大辞典第二版が収蔵されていた（写真3）。ハーバード大学フェアバンク東アジア研究センター長の Will Idema 教授も中日大辞典を愛用していた。Idema 教授は東アジア学部で中国文学を教えているが、昔、北海道大学と京都大学で一年間ずつ訪問研究をしていた。

フェアバンク・センターの Assistant Director の Ronald Suleski 博士によれば、われわれが訪問する前に、Idema 教授は愛知大学の『中日大辞典』について詳しく語っていたという。Suleski 博士は Harvard-Yenching Institute（燕京学社）にも勤めたことがある。彼は日本に長く住んでいた

ことがあり、ハーバード大学で有数の日本通である。また戦前の旧満洲の社会経済と近代化について研究していて、東亜同文書院大旅行記に対する関心が高い。

中日大辞典が刊行された時の世間の評価は高く、朝日ジャーナルや毎日新聞は「この辞典の出版によって、日本は中国語に関しては世界の学界に誇り得る金字塔を建てた」と絶賛していた。欧米の大学では東アジア研究専攻の学生に向けて、カリキュラムの中に中国語と日本語両方が必修科目として組み込まれており、時代に先駆けて発行された『中日大辞典』は、このように構造的に広く使われていた。中日大辞典が日中兩國を越えて、広く世界的に使われてきたこの現象を、ここであえて「中日大辞典現象」と呼ぶことにしよう。

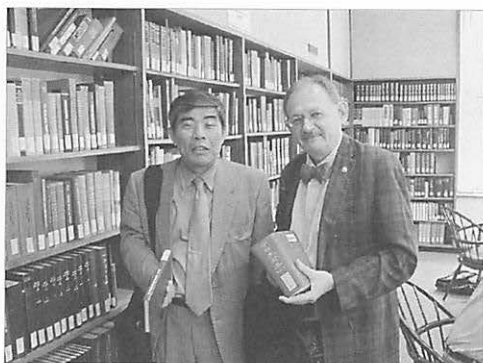


写真3 Harvard-Yenching Libraryで
山本一巳教授と Ronald Suleski 博士

五、愛知大学の中国研究戦略Ⅱ世界的なブランド形成に向けて

愛知大学と東亜同文書院大学は過去百年間にわたり、二〇世紀の日本における中国研究をリードしてきた。それはわれわれ当事者の認識を超えて、中国だけではなく、欧米でも高く評価されている。愛知大学はもって自信を持つてもよさそうである。

中国研究の「第二の世紀」に入りたいま、愛知大学は世界的な視野で東亜同文書院大学記念センターおよびそれに関する研究の戦略的な位置付けを再考すべき時期にきている。つまり、記念センターに展示機能だけではなく、研究支援機能を付加して、文部科学省を含めた内外の競争的研究資金の獲得や戦前の関連名著の復刻版の発行など（例えば、『大旅行誌』や『支那省別全誌』『支那経済全書』など）を視野に入れて、国際ネットワークの中で東亜同文書院大学の世界的なブランド価値を再認識すべきである。売れた分しか作らないオンデマンド印刷技術の登場で、印刷業界では書籍作成の初期コストが劇的に下がり、復刻版の発行にはこのうえない順風になっている。これらの努力は結局、愛知大学のブランド形成につながるもので、ひるがえって日本国内での知名度と競争力の向上にも貢献できる。

COE・ICCSが二〇世紀後半の現代中国研究の世界的な研究拠点を目指しているのであれば、東亜同文書院大学記念センターは、二〇世紀前半の近現代中国研究の世界的な研究拠点の形成を目指しても良いのではないか。それが二一世紀愛知大学の中国研究の両輪をなすものである。